〔九暦〕天德三年正月十日、道風令書障子給祿事、

〔江談抄五詩事〕粟田障子坤元錄詩撰者事

又被申者、粟田障子詩、輔正卿撰之、坤元錄詩、維時卿、然則作者與判者、各互有長短、隨其功也、粟田詩以言以帥殿〇藤原伊周方人不被入之、怨言云、雖坤元錄絕句、一首者何不罷入哉云々、故文章博士實範後傳聞此事、不被許此書云々、

〔大鏡三太政大臣實賴〕故中關白殿〇藤原道隆東三條つくらせ給ひて、御障子にうたゑどもかゝせ給ひし色紙形を、此大貳〇藤原佐理にかけとのたまはするを、いたく人さはがしからぬほどにまいりて、かゝれなばよかりぬべかりけるに、〇中略日たかくまたれたてまつりて、まいり給へりければ、すこしこつなくおぼしめさるれど、さりとてあるべき事ならねば、かきてまかりいで給ふに、女のさうぞくかづけさせ給ふを、〇下略

〔明月記〕文暦二年五月廿七日己未、予〇藤原定家本自不知書文字事、嵯峨中院障子色紙形故予可書由、彼入道〇宇都宮頼綱懇切、雖極見苦事、悉染筆送之、古來人歌各一首、自天智天皇以來及家隆雅經卿、

〔扶桑略記五天武〕九年十一月、因皇后病、造藥師寺、〇中略西院安置彌勒淨土障子、

〔吉記〕承安三年七月九日庚子、辰刻參院、奏御堂雜事七ヶ條、其中御堂障子繪、可被畫法花經佛像、并地獄之類、全不可憚之由有其仰、　十二日癸卯、天晴有餘勢、午刻參院、卽渡御新御堂、予追御障子繪事等、仰云、御堂之內御所、并左右廊、可畫廿八品也、於別御所者、可畫平野并高野御幸也、可仰常盤源二光長者、先紙形可令書土代之由仰行事盛綱了、　十三日甲辰、辰刻參院、〇中略又被仰云、御堂障子繪法花經事、勘出要文可進土代之由、可仰觀智僧都、　廿日辛亥、早參院趣奏御堂雜事、〇中略

一殿上廊障子繪事、申云、被畫本文可宜歟、仰云、仰永範卿長光朝臣等可令勘申、

〔類聚三代格十二〕勅、於圖書寮所藏、〇中略障子、并雜圖繪等類、一物已上、自今以後、不得輒借親王以下

障子用法